

さむえ

作務衣姿の東學さん(55)が、舞台いっぱいの大きな紙に向かって、墨をたっぷり付けた筆を走らせる。交代してもう1人の絵師が描いている間、學さんは紙に背を向け、客席に向かって座禅を組んで目を閉じる。2人とも終始無言でニコリともせず、奇妙な緊張感が漂う――。

昨年9月、大阪・十三の小さな劇場の薄暗い舞台。客席は女性客が目立つ。年齢層は幅広い。私は何が始まったのか理解できず、尾が落ち着かなかつた。だが、相手が天使を描いたのに対し、學さんが悪魔を描いた時、この舞台のタイトルが「禪問答ライブペイント」なのを思い出した。お互い、相手が何を描いたのかを見て、即興で描き加えたり塗りつぶしたりし、丁々発止と問答を重ねながら一つの墨絵を作つてゐるんだと。

そこまではわかつたが、舞台上ではさらに面妖なことが起きていた。大きな紙袋がガサゴソと音を立てて芋虫のように動き、やがてそこから半裸のダンサーが現れて、音楽と共に踊り出した。最後は、そのダンサーを紙に押し付け、學さんがその体に白い絵の具を塗りたくる。墨画の真ん中には、なぜか怪獸が描かれていた……。最後は舞台の上も學さんの作務衣も絵の具だらけ。なんともアングラ感いっぱいの舞台だった。後日、「竜を描こうとしたら怪獸になつた」と學さんは笑う。あれはどういう……? 「ダンサーが紙の袋から出てきたでしょ。無機質の生命が生まれたと。それを天使と悪魔が押し付け合つて……」。ようわからんけど、どうやら自分が楽しいことをやってるらしい。

學さんにはいろんな顔がある。近鉄アート館のこけら落としでは、歌舞伎役者の片岡愛之助さんとコラボレーションし、壁に4匹の竜と松を1時間で描き上げた。アイドルグルーブ、東京パフォーマンスドールの衣装デザインも「かわいい!」と、やに下がつて手掛けるし、かと思えば維新派やそとばこまちなど劇団のポスター・デザインの仕事を喜々とする。

いろんな仕事をこなす學さんだが、やっぱり中心にあるのは「女」だ。なにせ、中学1年の時、自習時間にヌード画を黒板に貼つて、先生に説教を食らつたというんだから。「家には言わないでください」と頼んだのに、帰つたら父親に知らせが届いていて、怒られるかと思つたら「どんなん描いてん?」と二コニコと聞かれた。

京都生まれの學さんの父親は扇絵師。絵が周りにあつたから、自然と絵を描くようになつたといふ。父親は花ばかり描いてた。それなのに「自分は女の裸ばかり。花が描けないのがコンプレックスやつたけど、ある時気付いた。おねえちゃんも花やん!」。そう聞いて思ひ当たつた。墨画集「天妖」に描かれている女たちは、どれもが花なのだと。それも、色のない花だと……。

14歳から3年、アメリカに留学。「両親が離婚して仕送りが途絶えて、学校の先生に絵を売りつけてメシ食つてた」。そんな留学時代に17歳で描いたフランス人形の絵が、ニューヨークのメトロポリタン美術館に買い上げられ永久保存されているといふ。

「そう聞いて。プロファイルに書いてたんやけど、自分は見たことがない。なかつたらどうしよ、とプロファイルから消した。そしたら、去年会つたモデルの子が『メトロポリタンで見ました』つて。あるんやん!」

晴  
ル  
デ

# 丁々 墨 絵 の 發 止 答 問



ダンサーの体に  
絵の具を塗りたくる東學さん  
=大阪・十三で  
2018年9月8日